

ENGAWA

平成26年度 第3号



■表紙のことば

2014年11月8日、浜松市中区肴町に「まちの駅 やらまいかショップ」がオープンしました。浜松市域の特産品のPRや、中心市街地の活性化を目的として、浜松商工会議所が出店を企画。浜松の特産品や、地域資源を活かした商品を独自に認定した「やらまいかブランド」や、浜松闘将・家康プロジェクト開発商品を中心に、食品や伝統工芸品など50品以上を取り扱っています。

また、まちなかのイベントにも積極的に活用し、12月23日に行われた「まちなか子どもフェスタ」では、多くの親子連れが来店しました。子どもたちが商品について熱心に尋ねるようすも見られ、浜松の未来を担う子どもたちが、地元に興味を持つきっかけの場としても期待されます。（やらまいかショップTEL:053-525-8927）

■目次

《特集》

ボランティアについて、見直してみませんか？
～ボランティアと組織の
より良い関係づくりとは～
・・・ページ2～5

《ENGAWAトピックス》

山里でがんばる2団体にインタビュー！
①NPO法人ががんばるやらまいか佐久間
②NPO法人ひずるしい鎮玉(しずたま)
・・・ページ6～7

《Check》

ボランティアの第一歩に！
『ささえあいポイント事業』って？
・・・ページ8

ボランティアって、 どんな存在？どんな関係？

あなたは“ボランティア”と聞いて何を思い浮かべますか？

『ボランティア募集！』のチラシや広告を見かけることも少なくありませんが、実は募集する側は意外と苦労や悩みが多いもの…。「思うように人が集まらない」、「参加してくれても一度きりで終わってしまう」など、思うようにいかないこともしばしばです。

では、ボランティアさんと良い関係を築くには、どうすればいいのでしょうか？今回はボランティアに関わる様々な人の声から、そのヒントを探ります。

Q. あなたの“ボランティア”のイメージって？



やりがいを感じるもの。
社会の役に立てるもの。

坂本朋子さん
(主婦)



世のため人のための
奉仕活動。

山本千津さん
(子育て支援団体スタッフ)



仲間との協調が大切！
自分も一緒に楽しむこと。

大城泰治さん
(趣味 陶芸)



“タダ働き”というイメージ。

北堀孝之さん
(会社員)



社会の一員になれる！

山本紗希さん
(高校生)

様々な立場の方
にお聞きしました！

ボランティアと言えばここ！

浜松市社会福祉協議会 に聞きました。

福祉関係のボランティアを中心にコーディネートしている浜松市社会福祉協議会に、取り組みの現状や課題、ボランティアに対する考えについてお話を伺いました。

社会福祉法人 浜松市社会福祉協議会
本部 地域支援課
主任 宇佐美 嘉康さん



福祉から災害支援まで

浜松市社会福祉協議会(以下、社協)では、主にボランティア活動に関して、2つの柱を中心に取り組んでいます。ひとつは新しい人材を発掘し、ボランティアに役立つスキルを身につけてもらうための「ボランティアセミナー」の開催。もうひとつは、受け入れを希望する団体・施設と個人のボランティアを結び付けるためのコーディネートです。福祉施設でのボランティア活動が中心ですが、近年は災害復興支援にも多く関わっているそうです。

ボランティア希望者と受入れ団体・施設は、「浜松ボランティアバンク」に登録してもらい、双方の希望にあわせて社協がコーディネートを行います。26年10月現在、275のボランティア団体が登録しています。

宇佐美さんによると、『参加者の年齢層は全体的に高めだが、災害支援の分野では、大学生から高齢者まで幅広い参加者が集まっている』とのこと。また最近では、社会貢献活動に取り組みたいという企業からの相談も、少しずつ増えてきたと言います。

ボランティア＝無償？

社協で取り扱うボランティアは、無償の場合が多いそうです。しかし、『たとえお金が発生しなくても、受け入れ側が、ボランティアを“無償の労働力”と捉えてしまうのは少し違うと思います。ボランティア活動にも、交通費や経費がかかっていることを理解した上で関わってほしいですね』と宇佐美さんは語ります。

“ボランティア＝無償”というイメージが先行し、その名のもとに、“タダ働き”を求めるケースもないとは

いえません。有償か無償に関わらず、ボランティアを受け入れる側が、“ボランティアとはどういう存在であるか”ということ、きちんと理解しておく必要があると言えるのではないのでしょうか。

「気軽にできない」

近年の傾向については、『ボランティアの存在が社会で認知されてきたと同時に、あてにされるようになってきました。余暇活動の一部というのではなく、求められるものが増えて、活動が難しくなってきた部分もありますね。』と宇佐美さんは言います。

ボランティアの裾野を広げたいという思いがある一方で、気軽に参加することが難しくなっているという現状。はじめの一步が楽に踏み出せるような工夫が、今後一層必要なのかもしれません。

一番大切なのは“地域”

今後は、若者の参加を増やしたいと考え、平成26年度、はじめて開催した「浜松市ボランティア交流集会」では、学生を対象とした分科会を設けるなど、積極的にアプローチしているそうです。とくに学生は、災害支援などには参加しても、その後、次の活動に繋がらないことが多いのだそうです。

卒業と同時に地域を離れてしまうケースが多いため、「活動が続けられる土壌をもっと作らなければと思う」と、宇佐美さんは今後の課題を挙げました。そのうえで、「災害支援とかそういうものをきっかけとして、自分の地域の活動や自治会活動に進んで参加してほしい。そこからもう少しと思えば、自分たちの特徴を活かしたボランティアを見つけるとか、広げてもらえるといいですね」と語ってくれました。

ボランティアの認知が広がった一方で、新たな課題も見えてきた今、受入れ側とボランティアとの関係づくりを見直すときに来ているのかもしれません。とくに、受入れ側が「ボランティアの気持ちを知る」ということが、ボランティアが社会で活かされる鍵になるのではないのでしょうか。



実践者に学ぶ！

あなたにとっての“ボランティア”とは？

「ボランティアという感覚は全くなくて、
“自分磨き”“心磨き”なんです。」



有限会社ありがとう
代表取締役社長
黒柳 誠さん

数年前から、中田島海岸でのビーチクリーンや、駅のトイレ清掃に自ら取り組んでいる黒柳さん。飲食店などを営む「有限会社ありがとう」の代表を務め、異業種経営者による地域貢献団体「遠州ありがとうの会」を主催しています。

自身の活動について黒柳さんは、「周りから見れば、ボランティアなんでしょ？って言われるけど、そういう意識は全くないんです。」とのこと。経営者として地域のためになにかできないか？と考えたのが活動を始めたきっかけだそうです。

ビーチクリーンには、毎回約300人もの方が参加しています。しかし、ボランティアのために人を集めよう

としているわけではなく、“自分にできることをしたい”という気持ちのある人が、自ら集まってくれているのだそうです。

これらの活動にかかる費用は自社で負担しているそうですが、それでもとにかくやり続けていくことが目標だと言います。「ゴミを拾うのも、ボランティアというより自分磨き・心磨き。全ては自分に振りかかってくる問題なんです。」と黒柳さん。

誰かに強制されるわけでもなく、“やってやってる”というものでもない。『できる人ができることをやろう』という姿勢が、多くの人を巻き込み、継続的な活動になっているのではないのでしょうか。

「自分が教えたことを、
子どもたちがわかってくれたときが一番うれしい。」

小澤さんは、浜松市母子寡婦福祉会が行う、学習支援ボランティアに参加している大学生のひとりです。月に2回程度、ひとり親家庭の子どもたちに対して、学習の補助をしています。

教員免許の取得を目指す小澤さんは、大学の授業でこのボランティアを知ったそうです。「少しでも経験が積みめれば」と考え、参加を決めました。またそれだけではなく、「わたしにも同じような境遇の身内がいるので、少しでも力になれば」との思いがあったそうです。

このボランティアには、現在22名の大学生が登録し、土曜日の午前中2時間、小学生～中学生までを対

象に支援しています。小澤さん自身は9月から参加し、まだ4回程度だそうです。活動にやりがいを感じていると言います。「子どもたちが、わたしが教えたことを理解してくれたときが一番うれしい。」

費用面では、交通費として一定額が支給されているそうですが、その点については、「たまたま支給があっただけ。なくても参加しています」ときっぱり。参加の動機に加え、その背景にあるのは、「教えるのが好き」という気持ちだそうです。

自分の好きなこと、興味のあることが人の役に立ち、自分自身も成長できる。小澤さんはそんなボランティア活動の魅力を教えてくれました。



静岡文化芸術大学
1年 小澤 智美さん

ボランティアに選ばれる団体になる！



社会福祉法人 大阪ボランティア協会
事務局主幹 岡村こず恵さん

どんな団体がボランティアに選ばれるのか？ボランティアとの関係づくりの秘訣は？設立50年を迎え、常時約140人のボランティアとともに事業を行う、大阪ボランティア協会の岡村さんに伺いました。

大阪ボランティア協会とは？

市民の“参加”を理念とし、ボランティア、NPO、企業の社会貢献活動の支援を行う。事業の多くがボランティアと職員の協働により運営されており、ボランティア活動の草分け的存在である。

ボランティアは“拡充”が得意

大阪ボランティア協会では、ボランティアは社会と組織をつなぐ存在、そして活動の質や可能性を拡充してくれる存在と捉えています。しかし、注意しなければならないのは、あくまで“拡充”であって、“補充”してくれる存在ではないということ。例えばイベントを行うとしたら、必要最低限の体制はできるだけ有給の職員で作りますが、より質を高める部分を主にボランティアに担ってもらうように考えます。

忘れてはいけないのは、ボランティアには断る権利・辞める権利があるということ。『絶対〇〇しなければならない』というものはあまり得意ではない、ということを理解しておく必要があるでしょう。

このように“ボランティアの特徴”を理解しておくと同時に、もしこれから受け入れを始めようとしているなら、『なぜボランティアと一緒に事業をするのか？』ということを組織全体で共有することがとても大事です。ボランティアを受け入れる合意や組織の基盤ができてこそ、活動の魅力を伝えることができます。団体の基盤を整えた上で、受け入れに臨んでほしいと思います。

参加者の期待とは？

ボランティアの満足度を高めるためには、参加者が何を期待しているのかを知ることが大切です。プログラムによって、参加者が共感していることはまったく異なります。例えば、子どもの虐待を何とかしたいという強い使命感に共感しているケースと、家族で楽しく過ごせて、さらに環境に優しいことができればと、気軽にクリーンハイクに参加するケースは、達成したいことや期待に違いがあります。それに合わせて説明の仕方や内容の見せ方など、相手の期待に応えられるように工夫しています。

それぞれに共感ややりがいを感じる部分は異

なるため、プログラムに応じたアピールをすることが、大切であると言えるでしょう。

“タダでもする”の真の意味は？

ボランティアと受入れ団体の関係においては、「私たちのことを『タダ働きしてくれる人』と、勘違いしているのでは？」とボランティアに勘ぐらせてしまったり、一方で団体が、『交通費くらい支給したほうがいいのか？』『少しくらいお金でも払わないと来てくれないのでは…？』などと悩んだり、無償であるがゆえの難しさも多いものです。

この点については、まずボランティアの特徴である“無償性”を、正しく理解する必要があります。無償性とは“タダでする”という意味ではないんです。強いて言えば“タダでもする”ということ。そもそもお金以外のことを期待して参加するのだから、もらえるかももらえないかが重要というわけじゃないのです。

わずかでも謝礼をいただけることはもちろん嬉しいのですが、それ以上にやりがいがあったり、成長できたり、居場所があったり、仲間がいたり、そういうことを得られたら嬉しいという価値観も確かにあります。こういう“お金以外のお返し”を本気で提供できているかを考えてみてほしいです。

受入れがうまくいかないと思ったら、まずボランティアの気持ちに耳を傾けてみる。これが良好な関係づくりの大切な一歩です。

おわりに

ボランティアとの関係づくりで大切なのは、まず参加者と同じ目線に立って、その考えや思いを知ることだと感じました。そこに歩み寄っていくことで、組織が市民感覚を保つことにも繋がるでしょう。

ボランティア活動は、市民がまちづくりに参加する第一歩。“人が育つ機会”と考え、参加者に市民活動の担い手として、成長してもらえる活動になればと感じました。

ENGAWA トピックス

地域に人を呼び込むため、地域の資源を活かすため、浜松市内各地では、日々多くの団体が活動しています。今回は、山里で頑張る2団体にインタビュー！活動に対する思いや工夫を語っていただきました。

NPO法人がんばらまいか佐久間

天竜区
佐久間町

そばづくり、森づくりで、都市部との交流と協働を進めたい



NPO法人がんばらまいか佐久間
事務局 河村 秀昭さん

NPO法人がんばらまいか佐久間は、平成17年7月1日、旧佐久間町が浜松市と合併したことに伴い設立されました。行政や民間サービスのすき間を埋め、住民自らの手で地域を支えていくために活動しています。

事業内容は、地元の女性たちが地場産品の販売や地域の交流拠点を目的に運営しているお店「いどばた」、町内の公共交通の空白地域を補うため運行しているNPOタクシー、定住・移住の支援など、多岐に渡ります。

また、地域資源を活かした都市部との交流事業にも力を入れています。平成22年から開始したそばづくりパートナー制度では、平成26年12月現在までに、9組70名がパートナーとして登録。それに加え、今後は新たに森林整備を通じた環境づくりにも取り組み、都市部とのさらなる交流の活性化を図りたいと言います。交流と協働への思いを、事務局の河村さんに伺いました。



平成22年から実施しているそばづくりパートナー制度。参加者は、草取りや種まき、収穫、脱穀、そして試食会と、年間を通してそばづくり楽しむことができる。

河村： 佐久間町の人口は、平成26年4月1日時点で約4,200人。NPO発足以来、わずか10年足らずで1,000人以上減っています。そのような中で、私たちの力だけではできないところを、都市部の人たちとの交流と協働を通して、一緒に取り組んでいきたいと思っています。

その一つとして考えているのが、森づくりの事業です。佐久間町の浦川という地区には、まだ木材の価値が高かった頃、子どもたちの育英資金にと寄付された森があります。そこを整備したいという思いを、地元の方はずっと持ち続けてきました。しかし、少子高齢化、過疎化が進む佐久間町の住民だけでは、やはり体力的にどうしても難しいというのが現実です。

そこで、企業や大学など、都市部の人たちと森づくりの理念を共

有し、皆さんの知恵やアイディア、体力などを活用させていただきながら、事業を進めていきたいと思っています。

都市部に当たり前のように行き渡っている水は、上流部の大きな自然の中で育まれています。そのため、都市部の人にも、もっと上流地域のことに興味を持って、気軽に足を運んで欲しいと思っています。そういう中で新たな出会いが生まれ、山と都市部の人たちとの交流がもっと盛んになると嬉しいですね。

東京で生活していた河村さんが、佐久間で活動するきっかけとなったのは、佐久間町の人々との「出会いと巡り合わせ」があったからだと言います。そこがどんな場所かということより、そこに誰がいるのか？それが、交流のキーワードかもしれません。

Pick Up!

佐久間で一緒にがんばらまいか！

まちなかからのサポーター大募集！

がんばらまいか佐久間と一緒に、森づくりをしませんか？活動を通して、やまとまちの交流を深めましょう！

詳細は、浜松市市民協働センターHPをご覧ください。

<http://www.machien-hamamatsu.jp/>

NPO法人ひずるしい鎮玉^{しずたま}

地域の特色を活かして、引佐ならではの田舎体験プログラムを

北区
引佐町



NPO法人ひずるしい鎮玉

(中) 理事長 石野 好弘 さん
(右) 副理事長 森下 宏平 さん
(左) 事務局 廣瀬 稔也 さん

NPO法人ひずるしい鎮玉は、平成25年2月、浜松市北区引佐町北部に位置する鎮玉地区の、田沢、別所、的場四方浄という3つの自治会が中心となり設立されました。

「蛸の里」として有名な鎮玉地区ですが、近年は蛸をはじめとする希少な生き物の減少や、少子高齢化に伴う耕作放棄地の増加、里山の景観の荒廃などが問題となっています。そこで、地域資源や遊休農地を活用し、地域外からの交流人口や定住人口を増やすことにより、地域活性化を目指しています。

これまでに、河川環境整備やピオトープづくり、農家民宿の開業、農作業体験会などを行い、平成27年度からは、遊休農地を活用した田んぼオーナー制度も開始。多くの人に参加していただきたいと意気込んでいます。

“鎮玉ならではの”の魅力を売りにした取り組みの工夫と、活動に対する思いを、事務局の廣瀬さんに伺いました。



近隣の学校の協力なども得てつくったピオトープ。蛸をはじめ、水辺の貴重な生物が育っている。環境学習会などを開き、大人から子どもまで、身近な環境を学ぶ場となっている。

廣瀬： 鎮玉地区はガイドブックに載るような地域ではありません。しかし、逆転の発想で「何も無い」ことを売りにして、田舎ならではのゆったりとした時間を体験できるプログラムを提供したいと思っています。

現在、浜松市の“中山間地域まちづくり事業”に採択された「田舎ゆったりプロジェクト」を軸に、河川や里山の整備を進めながら、地域外から人を受け入れる体制を整えています。

例えば、生物の専門家である常葉大学の教授とそのゼミ生、県立引佐高等学校の生物科学部、引佐北部小中学校などと連携しながら、環境学習の拠点としてピオトープをつくり、一般の人を対象とした環境学習会などを開催しています。

また、いくつもの小川が流れる地形を活かし、川を道と見立てて、伝統の技を持つ人々などを訪ね歩

けるマップを制作しています。人を巡り、自然を楽しみながら、田舎を体験してもらえればと思っています。

このように、ささやかなものでも、田舎の良さを感じていただけるプログラムを通じて、徐々に交流事業の規模を広げ、多くの人と顔と顔の見える関係をつくっていきたくと考えています。最終的に、定住者や、地域の応援団として足しげく通って下さる人を増やし、地域の持続可能性につなげていければと思います。

近隣の学校や、地元に住む人々との積極的な連携。それは、「この地には何も無い」と思っていた地元住民の心に、地域への愛着や誇りを育むことにもつながります。多くの人を呼び込むだけでなく、地域の心も育む仕組みづくりは、地域活性化において忘れてはいけい、重要なポイントではないでしょうか。

Pick Up!

平成27年度 田んぼオーナー募集中!

ご家族やお友達、職場の同僚と、お米づくりを楽しみませんか？
新東名高速道路浜松いなさICから、車でほんの5分程度。気軽に来て、ちょうど手頃な地域です♪

詳細は、NPO法人ひずるしい鎮玉HPをご覧ください。

<http://shizutama.jp/>

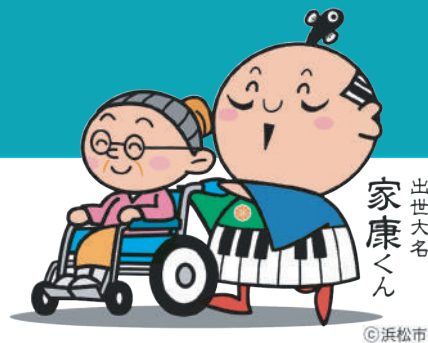
Check!



貯めたポイントを換金できる!

ボランティアの
第一歩に!

浜松市ささえあいポイント事業って?



©浜松市

浜松市は、平成26年10月より「ささえあいポイント事業」を開始しました。介護施設や高齢者宅などでボランティア活動を行うと、換金できるポイントがもらえます。

10月末日で、65歳以上を中心に、延べ1,000人を超える市民がボランティアに登録。ささえあいの輪は、着実に広がっています。事業の内容や特徴について、浜松市健康福祉部介護保険課にお話を伺いました。

● ささえあいポイント事業をはじめた理由は?

浜松市の高齢化率は、平成26年10月で約25%。「4人に1人」が65歳以上です。龍山や佐久間、水窪のように、50%を超えている地域も存在します。しかし、健康寿命が長く、元気な高齢者が多いのが特徴です。

そこで、元気な高齢者に、支援が必要な高齢者を支えていただく仕組みをつくっていきたいという狙いを持って、事業を開始しました。

● この事業の特徴は?

参加の形として、市内の介護施設などで活動する「施設ボランティア」（参加者は65歳以上限定）と、天竜区や北区の一部で高齢者支援を行う「中山間地域ボランティア」（参加者の年齢条件なし）があります。事業をきっかけに、多くの皆さんにご参加いただき、ボランティアの裾野が広がればと考えています。

また、今回ポイント付与という形を取っていますので、継続して活動する励み等にしていただけだと思います。

● これから参加したい人に一言

これまでボランティアをしたことがない方には、まず介護施設などでの活動をおすすめします。ボランティア受入施設として、10月末日で337の事業所が登録されています。各施設がどのような活動を募集しているか、ささえあいポイント事業のホームページ等で紹介しています。

そのような情報なども参考にしながら、まずはボランティアの第一歩として、この事業を活用していただけたらと思います。

ボランティア参加の流れ

1 ボランティア登録研修の受講

研修を受講すると、『ポイント手帳』がもらえます。

研修
申込先

浜松市社会福祉協議会
本部 地域支援課
TEL 053-453-0580



2 ボランティア活動をして、ポイントを貯める

活動したい施設などと日程を調整し、ボランティア活動を行います。



3

ポイントの換金

3月までの活動で貯めたポイントを、毎年4月に換金申請すると、1ポイントにつき100円に換金できます。換金のかわりに寄付も選択できます。（寄付先は、複数の選択肢の中から選べます。）

ささえあいポイント事業に関するお問い合わせ

●浜松市 介護保険課 総務・給付グループ
TEL 053-457-2862

これからの社会では、地域住民の支え合いの力がますます必要とされています。今回紹介した事業などを利用して、あなたも地域を支える一歩を踏み出してみませんか?

発行 浜松市市民協働センター 〒430-0929 浜松市中区中央一丁目13-3
電話 053-457-2616 FAX 053-457-2617

[HP] <http://www.machien-hamamatsu.jp/> [E-mail] kyoudou@machien-hamamatsu.jp